

シチトウイの伝播と栽培の中心

—国東半島の事例—

紀 禎 哉

はじめに

タタミは、われわれの生活様式に必要な欠くべからざるものであり、イグサ *Juncus・effusus* からなる「備後表」と、シチトウイ *Cyperus・malaccensis* からなる「青表」に大別できる。現在では、イグサは、熊本・福岡・広島・岡山の各県を中心に広範囲に栽培がみられるのに対し、シチトウイは、大分県の国東半島のみで栽培されるにすぎない。

本稿の目的は、国東半島の農業景観の最小レベル¹⁾として、最も特徴あるものと思われるシチトウイが、いかに伝播してきたか、また、伝播に伴い栽培の中心がどのように移動したのか、さらに、シチトウイの立地空間がいかなる条件の地にあるのかといった諸点を時代の推移とともに考えるところにある。

換言するならば、本稿は土地利用の地理学的研究の主流をなした経済的側面からの考察ではなく、従来付随的にしか述べられてこなかった栽培植物の歴史的背景や立地空間に視点をあてた、歴史地理学的考察である。

本稿作成にあたり、特に留意した点は以下の2点である。

- i) 地域のフレーム・ワーク²⁾の中で、シチトウイを景観構成の最小レベルとして取り扱うこと。
- ii) 土地利用の研究では、従来等閑視されてきた栽培の中心³⁾について、筆者の立場を主張したこと。

なお、調査対象地域としてマクロ・スケールで国東半島を選定したのは、現在、シチトウイ

の栽培が残されている唯一の地域であること。そして、国東半島が海と山に囲まれ、他の地域からのイノベーションが比較的受けにくい空間であると思われたからである。

次に、マイクロ・スケールの対象地域としては、国東半島の南部に位置する杵築市を選定した。その理由は、そこが国東半島におけるシチトウイ栽培の第2次起源地と推定される地域であり、また、その栽培過程に大きな変貌がみられたからである。

立地空間の考察では、同市西下司・東下司の地域を取り上げるが、それは生態的にみてシチトウイ栽培にかなり有利な立場にあり、現在もなお、その栽培景観が確認できる地域だからである。

I 大分県のシチトウイ

主要県別シチトウイ作付面積の推移を示したものが表1である。これをみると、各年代を通じ、静岡・熊本・大分・鹿児島⁴⁾の4県で常に全国の作付面積の80%を占めていることが理解されよう。とりわけ大分県は、戦後の特殊な食糧事情の期間を除いて、常に60%の値を示している。また少しずつではあるが、作付比が上昇し、その継続として今日のように、大分県のみで栽培されるようになったと考えられる。

次に、大分県のシチトウイ作付の状況を示したのが図1および図2である。図1では、明治11年(1878)から昭和55年(1980)までの推移を示し、図2では、明治13年(1880)から昭和15年(1940)までの県内各郡の作付面積の推移を示した。

表1 主要県別シチトウイ作付面積の推移

県名	明治40年		大正13年		昭和15年		昭和21年		昭和36年	
	ha	%	ha	%	ha	%	ha	%	ha	%
静岡県	194.5	8.8	204.6	7.8	201.9	9.2	89.3	12.9	270.0	14.4
熊本県	233.4	10.5	225.0	8.6	226.8	10.4	144.0	20.8	210.0	11.2
大分県	1,375.0	62.1	1,629.1	62.0	1,368.0	62.8	371.3	53.8	1,270.0	67.9
鹿児島県	180.0	8.2	141.3	5.4	106.3	4.9	36.9	5.3	97.0	5.2
その他	229.5	10.4	428.0	16.2	274.3	12.7	48.7	7.2	23.0	1.3
計	2,212.4	100.0	2,628.0	100.0	2,177.3	100.0	690.2	100.0	1,870.0	100.0

(農商務省統計・農務省統計・農林省統計による)

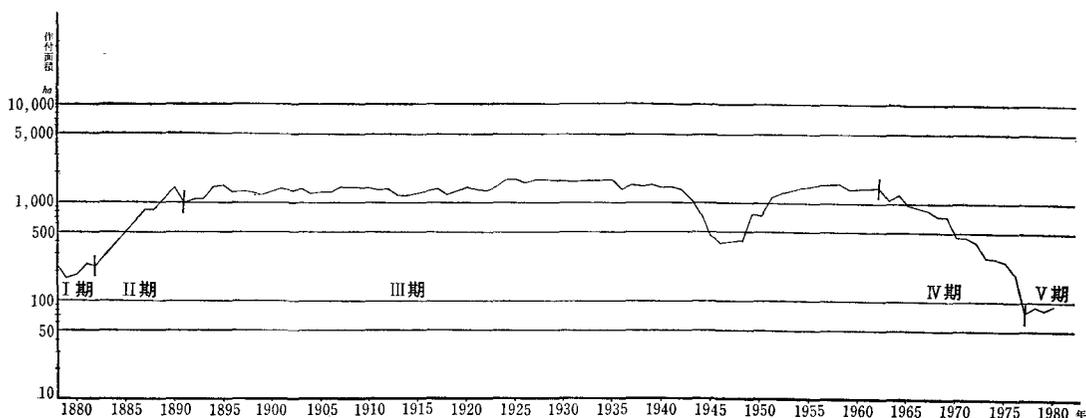


図1 大分県のシチトウイ作付面積の推移 (大分県統計書・農商務省統計・農務省統計・農林省統計より作成)

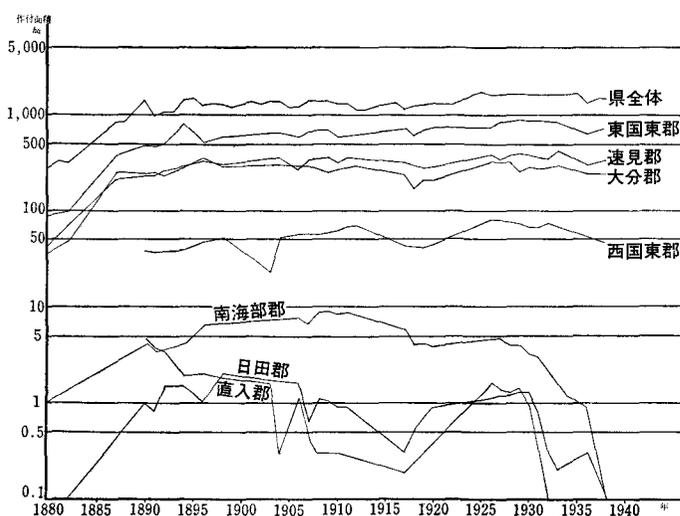


図2 大分県諸郡域のシチトウイ作付面積の推移 (大分県統計書より作成)

図1をみるとシチトウイ栽培の歴史的展開は次の5期に区分できるように思われる。

- 第1期 初期採用期⁴⁾ 伝播が行われた時から明治15年(1882)まで。
- 第2期 発展期 明治16年(1883)から明治22年(1889)まで。栽培が急速に伸びた時期。
- 第3期 安定期 明治23年(1890)から昭和36年(1961)まで。作付面積に大きな変化⁵⁾がみられない時期。
- 第4期 衰退期 昭和37年(1962)から昭和51年(1976)まで。栽培の急激な減少期。
- 第5期 終末期 昭和52年(1977)以降。作付面積の安定期。

第1期(初期採用期)は、作付面積が200ha前後を上下し、地域的には東国東・速見・大分の各郡域のみに限られていたことが、図2より理解される。

第2期(発展期)は、作付面積が急速に増大する時期である。後述するごとく、この時期に「栽培技術の革新」がもたらされ、県内の各地にシチトウイが伝播した。

第3期(安定期)は、統計的にも他の郡域で作付が実証される時代である。しかし前記の郡を除く他の郡域では、その栽培は試行錯誤の段階に留り、昭和15年(1940)までに消滅してい

ることが図2より読みとれる。そしてこれらの郡域では、食糧事情の回復による作付面積の増加期においても、作付の復活がなかったことが統計により判明した。

第4期(衰退期)は急激な作付減少がみられた時期である。この時期は、大分県の各地においてシチトウイ栽培が消滅する時期である。図1および表2でわかるように、シチトウイは昭和36年(1961)を境に大きく作付が減少する。たとえば、かつて一大産地であった速見郡日出町では、昭和40年(1965)に168.9haの作付が確認できたが、昭和50年(1975)にはわずかに1haの作付となり、翌年には消滅している。また大分市でも、昭和40年(1965)の120haから昭和45年(1970)に7haとなり、昭和50年(1975)には栽培が消滅している。その他の地域をみても、太田村を除く西国東郡域で栽培が消滅するほか、他の国東半島域でも、この時期に大きな作付面積の減少がみられた。

昭和52年(1977)以降の第5期にみられる作付の事情は、シチトウイ栽培の終末期ともいえよう。この時期における作付面積の増加は、米の減反政策に対応する一時的増加でしかない。栽培農家の意向としては「できうるものなら、栽培をやめたい。」⁶⁾というのが本音であり、何らかの外的インパクト⁷⁾を受けたなら、栽培は一斉に消滅するといえよう。

表2 昭和40年以降のシチトウイ市町村別作付面積

	昭和40年 (1965)	昭和45年 (1970)	昭和50年 (1975)	昭和51年 (1976)	昭和52年 (1977)	昭和53年 (1978)	昭和54年 (1979)	昭和55年 (1980)
杵築市	195 ha	153ha	78ha	15ha	7ha	7ha	7ha	7ha
安岐町	150	93	93	40	34	35	35	36
武蔵町	80	45	19	3	4	5	5	6
国東町	181	94	47	32	29	39	35	38
太田村	28	26	13	5	3	2	2	2
山香町	4.5	2	—	—	—	—	—	—
日出町	168.9	34	1	—	—	—	—	—
大分市	120	7	—	—	—	—	—	—
その他	2.6	1	—	—	—	—	—	—
計	932	455	251	95	77	88	84	89

(大分県蘭業指導所調査による)

II 国東半島におけるシチトウイ

前章では、大分県のシチトウイ栽培の事情を統計的視点よりみてきたが、ここでは現地調査に基づいて、シチトウイがどのようにして半島にもたらされ、また伝播したのか考察を試みる。

1) 研究対象としての国東半島

対象地域である国東半島は、大分県の北東隅に位置し、東西約35km・南北45km、最高点の両子山(720.8m)を中心に、ほぼ円形に近い半島である。河川はそこより放射状に流出し、開析が進んでいる。山稜は、河川との関係から放射の形態をなす。それゆえに沖積地は半島南部の八坂川・高山川を除けば放射谷に存在する⁹⁾。

海岸部に目を向けると、北部に短い入江がみられる。これは、開析火山の放射谷が沈降してできた溺れ谷であり、一部には、埋積されデルタの形成をみる地域も存在する¹⁰⁾。中部海岸地域の放射谷の末端には、シチトウイ栽培の舞台となる比較的大きな三角州が発達し、国東町の田深・鶴川や武蔵町の古市、安岐町の塩屋など、かつて溺れ谷であったと思われる地域では埋積化が進行している¹¹⁾。また、この地域の海岸には砂丘の発達があり、半島南部では、大規模な砂嘴が発達している。そして、半島最大の平野が八坂川・高山川河口付近に拡大している。

これら沖積低地を形成する半島の放射状河川は、内陸部に段丘を有し、そこがまたシチトウイ栽培の舞台ともなっている。

2) シチトウイの伝来と第2次起源地

国東半島のいかなる所にシチトウイが伝来してきたかを理解する「史料」としては、『豊後七嶋菴由来覚書』¹³⁾『青七嶋菴由来之覚』¹⁴⁾『七嶋菴由来書覚』¹⁵⁾がある。そしてこれらをまとめた『国東町史』¹⁶⁾がある。これら文献によりシチトウイの伝播経路が確認できる。

まず、国東半島に限らず、大分県域へのシチトウイの伝播を年代順でみると、日出藩のものが最も早い。この藩では、山香郷の金山で働いていた鋤夫(とくに薩摩出身の者達)が納屋で

青菴を敷いており、それを知った初代藩主木下延俊が興味をもち、万治3年(1660)に家臣の長谷川伝兵衛を薩摩にやり、栽培技術を学ばせ、翌年の春に苗と織機を持帰ったことが記されている¹⁷⁾。

さて、国東半島へのシチトウイの伝来は、日出藩三代当主木下俊長の病の際、千本の通し矢が行われ、杵築藩から出席した弓の名人森永五郎左衛門が賞としてシチトウイの苗をもらい、八坂村(現杵築市)¹⁸⁾に栽培を試みたことに始まったとされている。

なお、国東半島への伝播経路とは直接関係をもたないが、府内藩でも、貿易商である橋本五郎左衛門が寛文3年(1663)2月琉球に渡る途中、七島(現在の鹿児島県鹿児島郡十島村)に漂着し、そこでみた草菴の苗を竹筒に隠して持帰り栽培を試みた。しかし栽培技術がわからず、彼は再び島に渡り、数十日の滞在により栽培技術を取得ののち帰藩し、府内藩シチトウイ栽培の先覚者となった¹⁹⁾。

このように、大分県域へのシチトウイの伝来は、ともに薩摩藩からのものであること、そして国東半島への伝来は日出藩からであることが明らかになった。

次に杵築藩八坂村のいかなる地で栽培が始められ、第2次起源地が形成されたかを検討する。しかし、この点に関しては筆者の知る限り、史料が存在しない。そこで次に示す作業を行い、推定することにした。

初期採用期では、シチトウイ栽培は、自然条件の上で最も繁殖のしやすい状態、すなわち、野生種あるいは野生化種が繁殖をするような状態の土地で始まったものと考えられる。そこで、シチトウイの野生種や野生化種が存在する熊本県緑川下流と吐噶喇列島の中之島において、いかなる状態でシチトウイが繁殖しているかを調べ、それを通じて、八坂村における第2次起源地を推測した。

図3は、熊本県中部を西流する緑川河口地域を示している。この付近では、昭和47年(1972)までシチトウイが栽培されており、現在も

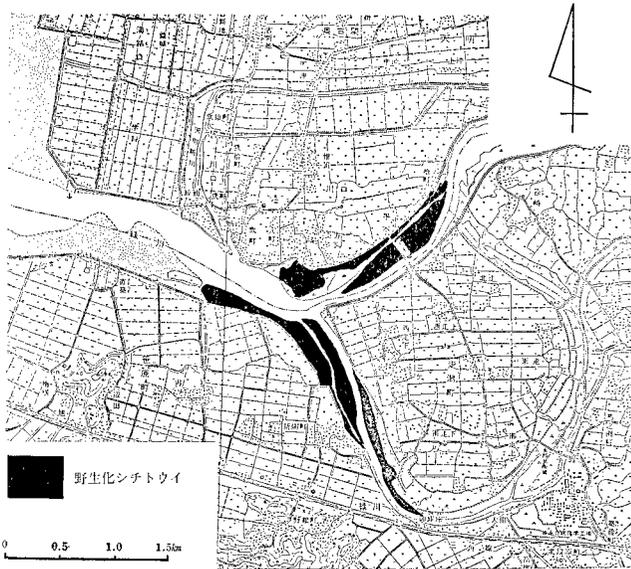


図3 緑川下流域の野生化シチトウイ (1980年8月, 現地調査による)

野生化したシチトウイの自生が河川敷に多くみられる。現地調査の結果, シチトウイは常時塩分が存在する場所ではなく, 真水ではあるが, 時折海水が流入してくる地点において多く繁殖していることが判明した。

また, 中之島でシチトウイの自生がみられるのは, 海岸沿いの道路ぎわのきわめて小さな沖積地においてである。この地点もまた, 通常は真水が冠水しているが, 高潮時には海水が流入してくる場所である。

これらの地域の事例から, シチトウイのすぐれた栽培地を一般化するならば, 真水の得やすい沖積地で, しかも塩分を含んだ水が得られる場所, すなわち潮入川の最上流部の沖積地に, 最良地をみることができるわけである。このことを裏付けるように, 宮崎安貞『農業全書』には, 「シチトウイ即ち席草, 是を琉球蘭と言ひ, 土質との関係は, いか程にも肥えたる田に宜し。殊に, 潮気の干潟の辺, 肥泥の所に取分よく出来るものなり」と記述されており, 栽培条件での塩分の重要性が示されている。

以上の事項より, シチトウイは旧八坂村(現杵築市)を流れる八坂川沖積地で, しかも潮入川の最上流部と考えられる地点, すなわち新庄

あるいは下本庄に試植され, 栽培が始まった可能性が高いと考えた。

3) シチトウイの空間的移動

空間的移動の研究にあたっては, さまざまな方法が存在するが, ここではC. O. サウアーが行った植物の生態的条件や栽培の歴史的過程に視点を置き, 伝播の実態を推測することにした。

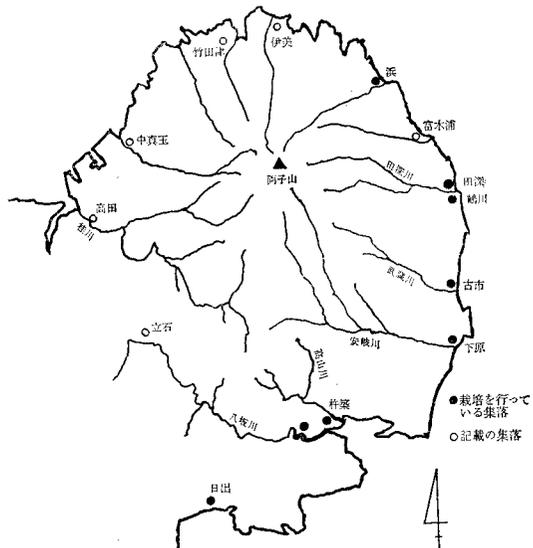


図4 『共武政表』にみるシチトウイ栽培地

初期採用期における伝播を示す資料として、まず明治12年(1879)の『共武政表』を用いて検索した。本書に記載の集落で、特産品にシチトウイの項目がみられたものを図化したのが図4である。この図によれば、海岸付近沖積地の集落にシチトウイの栽培がまず確認できる。このことはまぎれもなく、シチトウイ栽培が初期採用期では、生態的に有利な土地にのみ伝播したことを示している。

発展期においては、シチトウイの需要の増大などの外的要因ばかりではなく、何らかの内的要因も加わって、急激な作付面積の増加に至ったのであろう。すなわち、この時期に栽培条件の変革作用が加えられたものと考えられる。それらのイノベーション²⁴⁾により、従来は、海岸付近の沖積地において栽培されてきたシチトウイが、半島内部における沖積地、さらには沖積地以外の土地条件の地域にも伝播したと考えられる。その過程を図化したのが図5である。

要するに発展期においては、国東半島の農業景観の大きな特徴であるシチトウイ栽培が、半島内陸部に向けて、あるいは丘陵部に向けて増加し、かつては点的存在であったものが、面的存在へと大きく拡散していったと考えられる。

安定期におけるシチトウイの作付は、ほぼ一

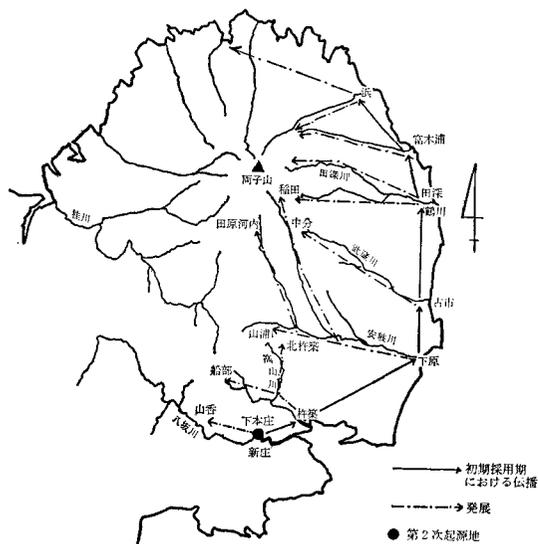


図5 想定されるシチトウイの伝播経路

定の面積で固定していたので、この時期においては他の地域への伝播もみられず、シチトウイ栽培は需給関係から限界を迎えたものと考えたい。

このように国東半島におけるシチトウイ栽培は、発展期末の明治21~22年(1888~1889)において、伝播を完了したのと考えられる。

4) 栽培の中心

シチトウイが国東半島に伝播し、先覚者地域が八坂川下流域に形成されたことは、上述の通りである。そしてこの栽培の中心としての地位は、初期採用期から安定期に至るまで変わることがなかったと考えた。その理由としては、杵築市がシチトウイの集散地²⁵⁾であったこと、昭和8年(1933)に、大分県七島蘭試験場が杵築市南杵築に開設されたこと、昭和24年(1949)この試験場が大分県蘭業指導所に改組され、ここを中心に栽培技術の普及がなされたことなどがあげられよう。また作付面積をみても、衰退期中頃の昭和45年(1970)に、杵築市は153haであり、安岐町の93haおよび国東町の95haを約60haも上回っていた。このことから、杵築市が衰退期中頃においても、なお栽培の中心であったことが知られたのである。

しかし、衰退期後半および終末期になると、栽培の中心は移動した。表2からもわかるように、昭和50年(1975)には、安岐町の作付面積は杵築市を上回っており、栽培の中心が移動していることが判明する。また、昭和53年(1978)には、安岐町の北に位置する国東町のシチトウイの作付面積が、最高の39haを示しており、栽培の中心が国東町に移動したことがわかった。

以上により、市町村単位にシチトウイ栽培の中心の動きをみるならば、衰退期後半に入って、初めて伝播範囲が「周辺地域」に移動していることが判明した。このことは、シチトウイの初期採用期より先覚者地域であった杵築市が、シチトウイのみならず他の作物に対しても同じように先覚者地域であり、何らかのインパクトを受けて、シチトウイの需要と供給のバランスがくずれ始め、他の地域よりもいち早く栽培作物

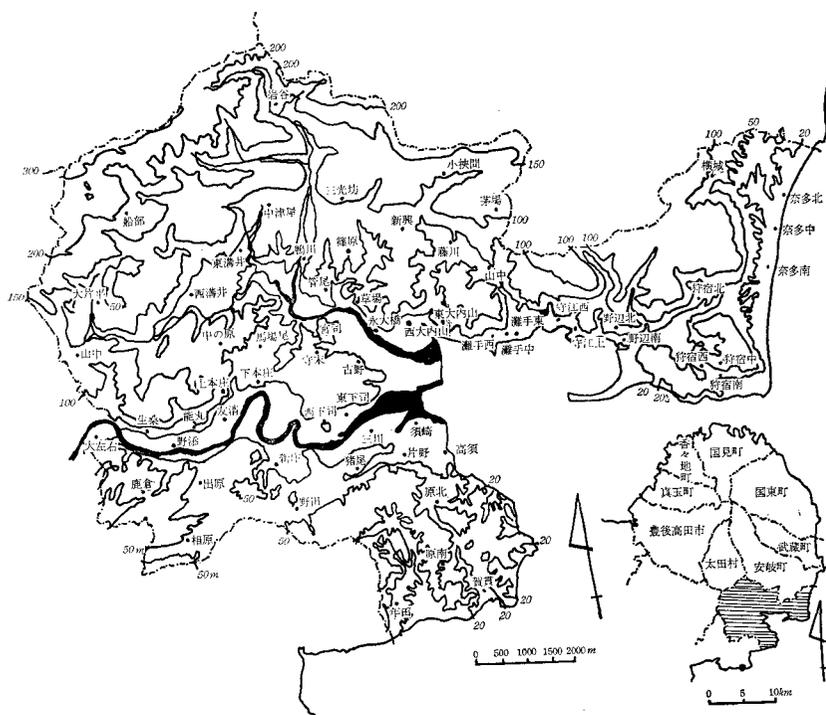


図 6-i 杵築市の農業集落概念図

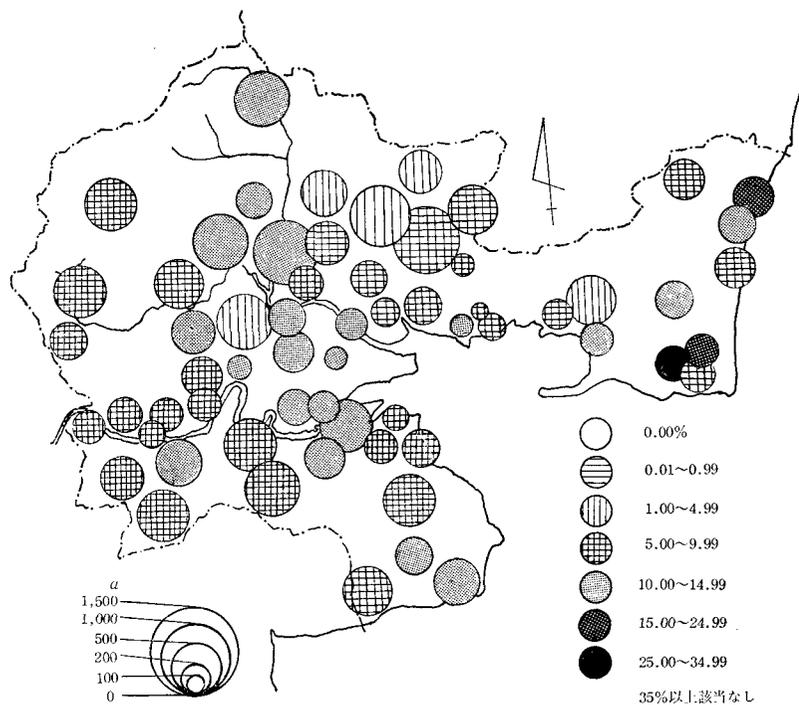


図 6-ii 1960年における経営耕地面積とシチトウイ作付面積の割合
(1960年農業集落カードおよび現地調査により作成)

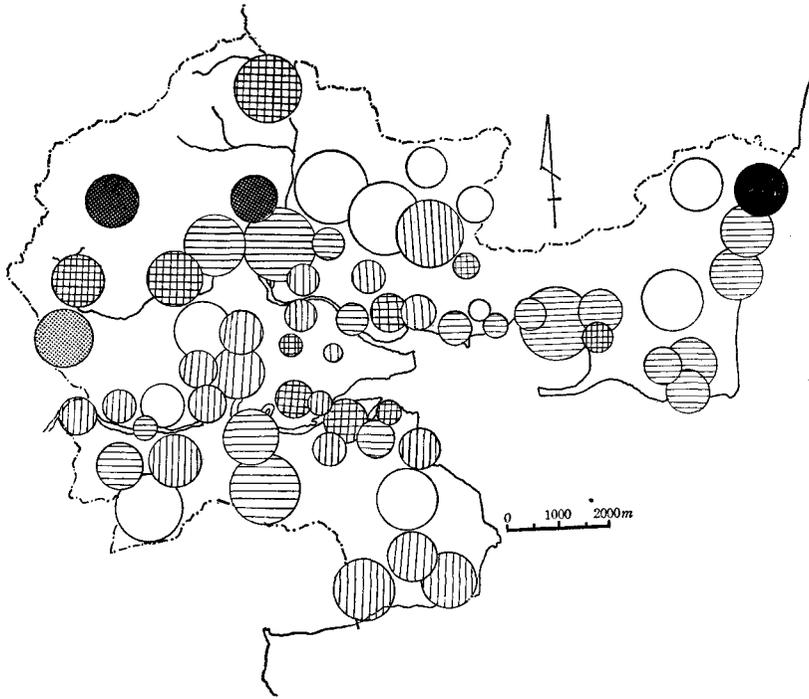


図 6-iii 1970年における経営耕地面積とシチトウイ作付面積の割合
(1970年農業集落カードおよび現地調査にて作成・凡例は図6-iiに同じ)

²⁷⁾の転換が行われ、杵築市の相対的地位が著しく低下したことが知られたのである。

次に、視点を農業集落のレベルに向け栽培の中心の最近約15年間の移動状況を、杵築市について考察した。

図 6-i から図 6-iv は、杵築市における農業集落の概念図および経営耕地面積に対するシチトウイ作付面積の割合を図化したものである。

図 6-ii は昭和35年(1960)のもので、安定期末のシチトウイ作付面積の状況を示している。この図によれば、三光坊・新興・小狭間の丘陵部に位置する3集落を除くと、市域の大半の集落で、シチトウイ作付面積の割合が経営耕地面積の5%以上を占めている。しかも、生態的にみてシチトウイ栽培に有利である八坂川下流域の集落では、その割合が10~14.5%となっており、杵築市における栽培の中心となっていることが判明する。

図 6-iii は、昭和45年(1970)におけるものであり、衰退期中頃に相当する。この図では、

ほとんどの集落でシチトウイ栽培の減少がみられるが、とりわけこの時期においては、市北部に位置する標高100m前後の茅場、また南部の標高20~50mに位置する相原・熊丸・中の原の集落で、栽培の消滅が確認できた。これに対し、船部をはじめとする山間部の若干の集落では、栽培の増加がみられる。これは、平野部の各集落²⁸⁾では、杵築市熊丸に立地した缶詰工場に労働力を奪われ、営農形態に大きな変化がもたらされ、栽培が減少したのに対し、山間部では土地生産性の高いシチトウイに²⁹⁾経済基盤を大きく依存したことから、作付面積が増加したものと考えられる。

以上により、この時期においては、シチトウイ栽培がまず丘陵部より減少し始め、栽培の中心が平野部と山間部の2極に分離したことが判明する。

図 6-iv は昭和50年(1975)のもので、衰退期末に相当する。この図によれば、生態的にシチトウイ栽培に有利な地である平野部に著しい

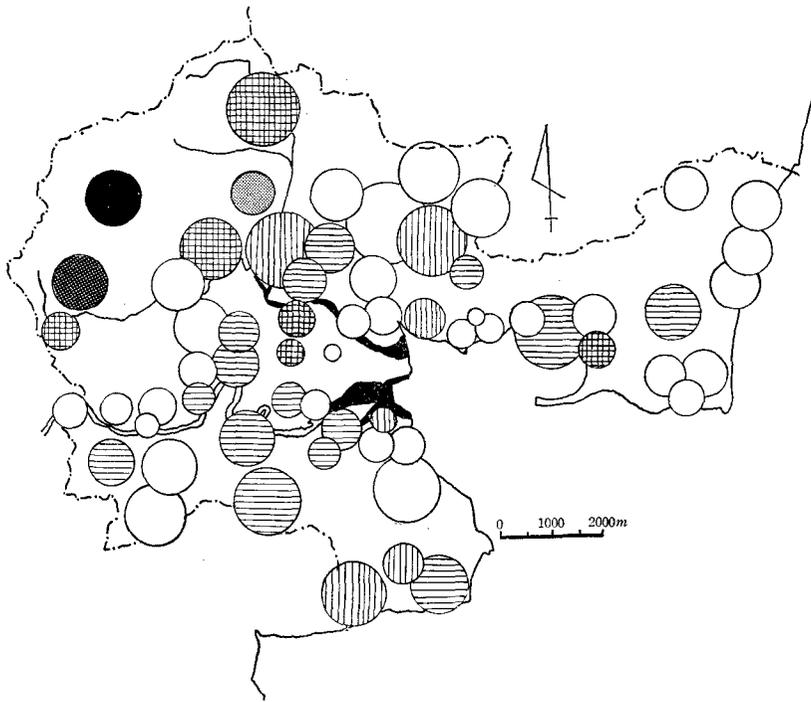


図 6-iv 1975年における経営耕地面積とシチトウイ作付面積の割合
(1975年農業集落カードおよび現地調査にて作成・凡例は図6-iiに同じ)

退化がみられた。平野部での栽培は八坂川沿いの集落においてのみ行われ、経営耕地面積の0.99%以下が3集落、1.00~4.99%が1集落確認できた。加えて海岸に沿った地域では、ほとんどの集落でその栽培が消滅している。これに対し、シチトウイ作付面積の割合が5%以上を占め、農業経営からみて大きくそれに依存していると思われる集落は、高山川上流域の比較的高い集落に限られ、特に山間部に位置する船部において、その割合が32.4%にも達し、栽培の中心となっていることが判明する。以上により昭和50年(1975)においては、栽培の中心が、海岸付近の生態的に有利な地域の脱落により、山間部に移ったことが判明した。表3は、杵築市の昭和55年(1980)における農業集落別のシチトウイ作付面積を表わしたものである。それによれば、栽培初期に伝播がなされた平野部では、新庄、下本庄、西下司においてのみ残存していることがわかる。また、最終の段階で伝播のなされた山間部の集落では、かなり高い割合

表3 昭和55年(1980)杵築市における農業集落別シチトウイ栽培

	栽培農家数 (戸)	作付面積 (a)
西 大 内 山	2	10
西 下 司	2	15
新 庄	5	26
下 本 庄	4	23
東 溝 井	3	24
船 部	12	80
鴨 川	1	3
岩 屋	25	145

(1980年センサスおよび現地調査より)

で栽培が残り、現在の栽培の中心が市の最北部に位置する岩屋であることも確認できた。

このようにマイクロ・スケールでも、栽培の中心は、衰退期以降伝播範囲の周辺で、しかも生態的にみて不利な条件のところへ移動したことが判明した。

5) シチトウイの立地空間

J. シュミットヒューゼンは、植生の立地空



図7 東下司・西下司の土地利用図（国土基本図をもとに1980年8・10月
現地調査および聞き取りにて作成）

間を「ある立地の質の具体的な範囲」「ある一生の生態的ポテンシャルを伴った地形的な範囲」と定義づけている³⁰⁾。この定義をふまえ、本稿では立地空間を「一定の範囲内におけるシチトウイの栽培空間」と考え、その栽培空間の変化を考察した。

元来、東下司、西下司地域では、八坂川の氾濫原に耕地を有し、北部の河岸段丘面および氾濫原の微高地に集落が位置することが、地形図および現地調査によって明らかになった。

図7は、東下司・西下司における安定期（昭和36年頃）と終末期（昭和55年³¹⁾）のシチトウイの立地空間を示した図である。

この図からシチトウイ栽培は、昭和36年（1961）には、集落周辺地域および集落より離れたところでは、道路に沿った耕地に立地することが理解される。このことには、シチトウイ栽培に必要な労働が関係している。たとえば、シチトウイは刈取り後に茎を分割する作業、あるいは天日に干すといった作業を伴う。これらの作業はともに、家の敷地内で行われるのが慣例となっており、運搬作業に有利なように家屋の周

辺あるいは道路沿いの耕作地を選択したことが考えられる。

昭和55年（1980）には、東下司でシチトウイ栽培がみられないのに対し、西下司ではわずかに栽培がみられた。その立地空間は集落の周辺に限られ、これもまた上述した労働量に関係して、この場所を栽培地としたのである。したがって、シチトウイの立地空間は他の作物と比べ、運搬労働力をより多く使用することから、距離的にみてより優位な場所を選択していることが明らかになった。

おわりに

以下においては、前記各項を要約し、立地空間のモデル化を次のように考えた。

国東半島におけるシチトウイ栽培の歴史は、17世紀後半に、八坂川下流域の新庄あるいは下本庄において第2次起源地が形成されたことに始まる。そして初期採用期において、半島内の生態的に有利な海岸付近の沖積地を選んで伝播し、発展期においては、イノベーションが加わり、半島内陸部および丘陵部に向けて伝播がな

され、この時期の終わりである明治22年(1889)に伝播はほぼ完了したと考えた。

栽培の中心に関しては、マクロ・スケールでも、ミクロ・スケールでも、中心は安定期までは移動することはない。しかし衰退期以降は、シトウイの先覚者地域は他の作物に対しても先覚者地域であり、栽培の中心は伝播範囲の周辺部の生態的に不利な場所に移動したことが、現地調査により判明した。

さて立地空間のモデル化であるが、先に述べたように、国東半島では安定期には、シトウイの立地空間は道路という条件が備わっていれば、それに沿って拡大が可能であったと考えられる。しかし、終末期では道路という条件に関係なく、集落付近ということが絶対的な立地条件となる。このことから、土地利用と距離の要素を組み合わせた模式図として、図8に示したものが想定される。

事例研究の不足から、なお結論としてためらう所があるので、諸兄の御教示を願いたく思っている。

(大阪教育大学・院)

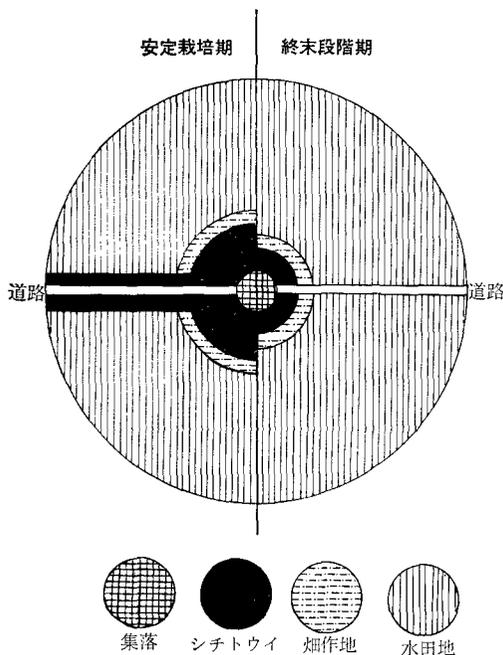


図8 シトウイの立地空間

〔付記〕 本稿は、1981年奈良大学文学部に提出した卒業論文にその後の成果を加筆訂正したものである。作成にあたり、終始御指導を賜った奈良大学教授藤岡謙二郎先生・大阪教育大学教授樋口節夫先生・前田昇先生をはじめ諸先生方に御礼申し上げます。また現地では、貴重な資料を提供していただいた大分県蘭業指導所所長阿南正氏にも深く感謝の意を表します。なお本稿の一部は、1982年度奈良地理学会冬季例会（於：奈良市立一条高校）で口頭発表したものです。

〔注〕

- 1) 2) 水津一朗は、「形態素」という概念を用いて説明している。水津一朗『新訂・社会地理学の基本問題』大明堂、1980、34頁
- 3) 本稿でいう栽培の中心とは、作付面積よりみた相対的な位置関係の中心を示すものである。
- 4) E. M. ロジャースは、さらにこの期間を、認知・関心・評価・試行・採用の各5段階に細分している。Rogers, E. M.: "Diffusion of Innovation" 1962 (藤竹 暁訳『技術革新の普及過程』培風館、1966、58~63頁)
- 5) 昭和16年から26年における減少は、戦争に伴うもの。
- 6) 杵築市大鴨川地区のシトウイ栽培農家での聞き取りによる。
- 7) 杵築市の丘陵部ではミカン栽培の導入、沖積地ではハウス栽培（主としてイチゴ）の導入により、シトウイ栽培が消滅している。また、蘭業指導所での聞き取りによれば、「昭和55年度のような天候不順からの極端な不作も、消滅への引き金になるのでないか。」と言っていた。
- 8) 9) 10) 11) 12) 兼子俊一「国東半島の地理的性格」大分大学学芸学部紀要1-2、1953、116~135頁
- 13) 橋本八左衛門『豊後七嶋延由来覚書』1720
- 14) 橋本八左衛門・梅屋助右衛門『青七嶋延由来覚書』年代不明
- 15) 十時英司『七島苗由来覚書』郷土史蹟伝説研究会、1933
- 16) 国東町『国東町史』1973
- 17) 18) 前掲書16) 406~407頁
- 19) 前掲書13) 4~8頁
- 20) 斎藤 毅「中之島および宝島における野生植物の利用」鹿児島地理学会紀要19、1971、119~126頁

- 21) 宮崎安貞『農業全書』巻6～11, 農山漁村文化協会, 1978, 72～73頁。もとの刊年は元禄10年(1697)
- 22) 浅野 勝「明治21年前後の国東半島における青表の地理学的研究の概報」大分県地理第5集, 1965, 27
- 23) Sauer, C. O. : "Agricultural Origin and Dispersals" 1952 (竹内常行・斎藤晃吉訳『農業の起原』古今書院, 1960, 29～90頁)
- 24) 内陸部の沖積地では, シチトウイ栽培地に塩を撒き, また畑作地へは, 腐植土あるいは砂壤土を盛土し, 更に植付期を早め, 栽培を可能にした。そしてこれらの導入時期は, ほぼ発展期と一致する。(大分県蘭業指導所にて聞き取る。)
- 25) 大分銀行『大分青表の現状』1959, 24～25頁
- 26) 昭和50年(1970)の作付において, 杵築市は78ha, 安岐町は93haとなっている。
- 27) 沖積地では輸送園芸作物に, 丘陵部では果樹作物へと変化した。
- 28) 丘陵部で栽培が行われているミカンを利用して立地。
- 29) 蘭業指導所長の話によれば, シチトウイは米作の約2倍の土地生産性がある。
- 30) Schmithüsen, J. : "Allgemeine Vegetationsgeographie" 1961 (宮脇 昭訳『シュミットヒューゼン植生地理学』朝倉書店, 1968, 153頁)
- 31) 昭和36年は, 蘭業指導所長に聞き取り。昭和55年は, 8月14～21日・10月3～15日の現地調査による。

On the Cultivation Center Area of "*Shichito-i*" and Its Diffusion:
A Case Study in Kunisaki Peninsula, Oita

Yoshiya KINO

The purpose of this study is to identify the former cultivation center area and the diffusion process of "*shichito-i*" (*Cyperus monophyllis*) which is still being cultivated at the Kunisaki Peninsula, Oita.

The results of this survey suggest that "*shichito-i*" had first been introduced in the ancient village, Yasaka-mura of Kitsuki Han, in the late seventeenth century, and that it had spread along the coastal lowland belt by 1882, and then had extended to inland areas of the peninsula by 1889.

At the cultivation center area, the pioneers in the cultivation of "*shichito-i*" replaced "*shichito-i*" with other plants after 1962. Consequently, the cultivation center has shifted toward the periphery of the cultivation area. At present, therefor, "*shichito-i*" is cultivated mainly in mountainous areas which are not really suitable for its proper growth.